転生者のハンターライフ【習作】

ままDoLL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生者のハンターライフ【習作】

【Ｎコード】
Ｎ５３５１Ｚ

【作者名】
ままＤｏＬＬ

【あらすじ】
滑って転んであら不思議。
これはＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲの世界へと転生してしまった一人の男の物語。

プロローグ

Ｗｅｂ小説。

なかでも二次小説とよばれる物でよく扱われるジャンルに、転生モノというジャンルがある。

まぁ、知っている人は知っているし、知らない人は全く知らない。多分そんなものだ。

「うばー！あばばばー！！」

世間一般で言うオタクそのものであり、アニメ・漫画の原作だけでは飽きたらず、ネット上で二次小説を山ほど漁って読んでいた俺にとってはなじみ深いもの。

転生。

「あぶぶー……」

俺にとって、転生とはまさに夢。

子供の頃ああしておけば…、あの時こうしておけば…なんて後悔は、腐るほどある。

もう一度生まれ変わって、全てをやり直したい。

あわよくば、こんな現実は捨てて、漫画やアニメなどのファンタジーな世界で、おもしろおかしく生きてみたい。

そんな後悔や妄想が腐って、発酵して、得体の知れないネバネバとしたナニかを体から噴出しまくっているのが、俺だ。

「うぶぶぶ……」

いや、俺『だった』。

「うばばー！！」

何故俺がこんなこんな思考をしているのかというと…。まぁネット上の諸兄ならば、もう察しが付いているだろう。

どうやら、俺は転生してしまったらしいのだ。

わーいやったね。

アパートの階段から降りようとして、足を滑らせて…そのままお陀仏。

コンクリートに打ち付けた頭から何やら、どろっとした脳味噌的

なモノが流れ出たのを感じたと思ったら、何かを考える前にそのまま意識を失って、気が付けば。

「うぶぅ……」

赤ちゃんに生まれ変わっていた。

まぁ痛いやら怖いやら感じる前に死ぬことができたっぽいのはラッキーだったと、今考えればそう思う。

痛いの嫌だし。

生まれ変わったといっても、自分の体が赤ちゃんになっていると気が付いたのが、ついさっき。

余りに理解不能な状況に混乱したり、半端じゃないほどの体の違和感に戸惑ったりしたが。

とにかく今は。

「あぶぶぶあーー！！うばー！！」

この状況を何とかして貰うのが先だ。

元気に声を上げる赤ん坊の俺を、笑顔で見詰める両親？そんなものはどこにも居ません。

気が付いたときには巨大な門のような木製の和風な扉の前で、絶賛『放置中』。

毛布に包まれてカゴのような物の中に寝かされている俺の目の前にある空からは、しんしんと音もなく降り続ける雪。

……捨て子ですね。分かります。

「……。」

ってアホか！？死ぬ！死んでしまう！

「あぶううあああああーーー！」

転生した瞬間捨て子でしかも死の危険とか、どんだけですかーー！？

誰か助けて！助けて下さい！

「うぶぶあー！！」

誰かに気付いて貰おうと叫び続けるが……。

「あぶ……！ぶぅ……」

眠くなってきました。はい。オワタ。

この動けもせず、数分で眠くなる赤ん坊の体が憎い……。

寒くて体は勝手に震えるし……『ダメだ！寝たら死ぬぞ！』をこんな形で経験することになろうとは……。

こんな転生ならしない方がまだマシだったな……。

「あぶぅぁ…」

あ、もう……

「……。」

だめっぽい……

「Zzz……」

第1話

俺はラスク。この世界に生まれて今年で3歳になった。

そう。俺は転生していきなり捨て子スタートという試練を乗り越えた、あの赤ん坊である。

結論から言えば、俺は助かった。

寝てしまった後しばらくして、運良く拾って貰えたのだ。

聞けば、俺は数日生死の境目を彷徨ったようで……。

毛布にくるまれていたとはいえ、あんな雪の寒空の中に数時間放置されていたので当たり前なのだが。

拾われた時にはもう殆ど死んでいるような状態で、何とか一命を取り留めたという。

そのとき俺を救ってくれたモノというのが……。

まぁ、そのことについてはまた後で。

俺も今年で精神年齢２８歳。まぁ何とか元気でやってます。

そんな俺の目の前で今、一つの戦いが繰り広げられている。

「ふんッ！はッ！どりゃーーーー！」

「ほっ！よっ！とと。――――フォッフォッフォ。まだまだじゃのう」

「押忍ッ！！てりゃーーー！」

広い道場。そしてその広い道場の中にひしめき合う肉、肉、肉。

むさ苦しい溢れんばかりの筋肉達に囲まれて、一人の老人と男性が戦っている。

実際は戦っているというより、老人は遊んでいるといった感じで全力で殴りかかっている男を軽くいなしているのだが。

「フォッフォ」

男が繰り出す拳の連撃を笑いながらかわし続ける老人。

「そろそろ終わりにするぞい」

「押忍！！」

「ふん！」

ドガァン！！

老人の一突き。

まるで力を入れているようには感じられないその右拳の一撃で、男は吹き飛び壁に叩き付けられた。

老人が、自分よりも二回りも大きい筋肉質の男を吹き飛ばすというこの光景。

転生する前の俺ならば驚いたかも知れないが、もう何度も目の当たりにして、流石に慣れてしまった。

「これからも精進することじゃな」

「ぐっ…っ…。お、押忍……有難う、御座い……ました……」

「今日はここまでかのぅ？――――おーい、ラスク！そろそろ帰るぞい！」

「はーい」

こっちに向かって歩いてくる老人はあれだけ動き回っていたのにも関わらず、汗一つかいていない。

高齢による肉体の衰えなど全く感じさせないこの老人こそが、捨て子だった俺を拾ってくれた命の恩人。

名をネテロという。

そう。俺が転生した世界。それはＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲの世界だったのだ！

何度も読んだあの有名な漫画。アニメにもなったあの世界に転生したのだ！

死にかけていた俺を救ったのが、念。

あの雪の日。

死にかけている俺を見つけたネテロが、ハンター協会専属の念医師なるものをすぐに呼んでくれたおかげで何とか一命を取り留めたのだ。

『ネテロ』、『ハンター協会』、そして、『念』。

それを知った時、俺は狂喜乱舞した。

魅力的なキャラクター。ハンターという優遇されまくった職業。

それに加えて、念能力！何度自分の念能力を妄想したか分からない。

その魅力的な空想の世界に、今俺は生きているのだ！と。

だが、次の瞬間には絶望した。

どうせならもっと違う世界に生まれたかった、と。

だってそうだろう？

物語の主要な登場人物も、時には何の罪も関係もない通りすがりの一般人まで、ぽんぽん死んでいく。

人の命なんてゴミクズほどの価値もない。

それがＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲという世界なのだから。

実際に俺を拾ってくれたネテロも、キメラアントとの戦いで自爆して命を落としたのだ。

原作に登場しない転生者の俺なんて、いつ死ぬのかわかったもんじゃない。

しかし幸いにも、俺はネテロというこの世界屈指の実力者に拾って貰うことが出来た。

一生誰かに守って貰うつもりはない。

そんな他人任せで生きていける程、この世界は甘くない。

自分の身は自分で守らなくてはならない。

せっかくＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲの世界に転生したのだから、原作には積極的に介入したい。

そのためには、建ちまくる死亡フラグをぶち折るだけの力が必要になる。

赤ん坊の俺なら、これから幾らでも強くなれる機会があるはずだ。

そう考えて、いくらか気持ちを持ち直したものの、赤ん坊の俺では出来る事に限りがあった。

なんとか情報収集をするのが関の山だった。

そんなこんなで、転生してから既に3年が経過してしまった。

調べが付いたのは今は１９８５年だということ。

そして、原作開始（ゴンがくじら島から旅立つ年）が１９９９年。これは漫画を何度も読み返したから憶えていた。

つまり原作開始は１４年後。その時に俺は１７歳になっている。

１４年必死に修行して念能力を会得すれば、最低限ハンター試験

でヒソカに殺されずに済むくらいには強くなれるんじゃないだろうか。

『有難う御座いました！！押忍！！』

心源流の門下生達の汗臭いお見送りの言葉を背に、俺とネテロおじいちゃん（そう呼べと言われた）は道場を後にした。

育ての親の“一人”であり、心源流の師範であるネテロおじいちゃんはたまにこうして俺を道場に連れてくるのだ。

流石にまだ3歳なので鍛錬に参加させられるようなことはないが、そろそろこっちからお願いしようかな～と思っている。

孫煩悩のネテロおじいちゃんは俺が心源流を習いたいと思っていると知れば喜ぶだろうし。

育ての親の“一人”というには訳がある。

ネテロおじいちゃんは俺を実の孫のように可愛がってくれているが、流石にハンター協会の会長でもある彼は忙しいらしく、たびた

び世界中を飛び回っていた。

つい最近まで乳児だった俺は、当然誰かに面倒を見て貰わなければならなかったので、そう言う場合は人に預けられた。

その時その時で預ける人が違うため、俺の育ての親（自称）はどんどんと増えていっている。

そして、

「おいコラ！クソジジイ！！『あたしのラスク』をあんな汗臭い道場に連れて行くなって何度言ったら分かるのかしら！？」

道場から出て少し歩いた所でいきなり現れ、ネテロおじいちゃんに罵声を浴びせる少女。

俺の育ての親の一人。

「あ、ビスケだ～！」

「久しぶりね～ラスク！」

俺が少女に駆け寄ると、彼女は自分のお腹あたりまでしかない俺の頭に手を載せて、ぐりぐりと撫でてくれた。

久しぶりって言っても、つい3日前まで一緒にいたんだけど…。

彼女の名前はビスケット＝クルーガー。

あのゴンとキルアも師事した、作品きっての美少女（？）であるビスケも俺を可愛がってくれているのだ。

何というラッキーボーイ。

「ほっほっほ！――――なぁ～にが『あたしのラスク』じゃたわけ！！寒空の中、道場の門に捨てられておったラスクを拾ったのは儂じゃ！」

「ふん！いつまで経っても名前の一つ決められないクソジジイの代わりに、その『ラスク』という名前を付けてあげたのは一体誰だとおもっているわけ！？そもそもジジイは拾ったっていうだけで、その後ラスクを此処まで育てたのはあたしでしょうが！」

「儂の名前から取って『テロル』という名前に一度決めたじゃろうが！」

「それじゃあラスクがテロリストみたいじゃないのよさ！」

「おーい……」

俺の声など聞こえないのか、ぎゃーぎゃーと言い争う2人。

目の前で繰り広げられる見慣れた口げんかに、俺はため息をつい

た。

俺を捨てた人間は、どうやら名前を付けるということさえ放棄したようで、俺を包んでいた毛布と籠以外は何の手がかりもなかったらしい。

国際人民データ機構にもデータが無かったと言うから、俺の両親は犯罪者か、もしくは流星街の住民か…。

まぁ、顔も知らない両親とおぼしき人間のことなんて、米粒ほどの興味もない。

むしろ、捨ててくれて感謝しているぐらいだ。

今はこうして幸せに生きているのだから。

とにかく、名前も何もなかった筈の俺の、この『ラスク』という名前は、ビスケが言っていたとおり彼女が付けてくれた物だ。

ビスケと出会ったのはまだ0歳だった頃。

俺が一命を取り留めて間もない頃、たまたまビスケがネテロおじいちゃんを訪ねてきたときに出会った。

赤ん坊の世話などしたことがないネテロおじいちゃんが、ただオロオロと困惑している様子を見るに見かねて、実際に俺を此処まで育ててくれたのは殆どビスケだ。

原作を読んだだけでは分からないビスケの隠された一面。

やはりビスケも一人の女性だったということか。

国際人民データ機構への国民番号の登録や生態データの登録等も、彼女が全てやってくれた。

母乳……ではなく、市販のミルクを与えてくれたのも、おしめをかえてくれたのも全部ビスケ。

それはもう甲斐甲斐しく世話してくれた。

その甲斐あって？ビスケは特別俺を可愛がる。

原作１４年前なので、ビスケは既に大体４０歳をすぎた位なのだが……。

既に念能力である魔法美容師（まじかるエステ）を開発済みなのか、筋肉質の大女ではなく、可愛らしい少女の容姿をしている。

まぁ、見た目はどうでも良いんだけどね。

ビスケは原作の中じゃかなり好きなキャラクターだったし。

こんな美少女に育てて貰えた俺は、かなりの幸せ者だろう。

とにかく、こうして2人が俺を巡って口げんかする（ときにはマジの殴り合いに発展する）のはいつものことなのだが、本人を目の前にして「捨てられていた」だとか「テロリスト」だとか大声で騒がないで欲しい……。

「「「「……」」」」

あぁ……通行人の視線が痛い……。

「ラスク！！」

「わっ！」

口げんかが終わったのか、ビスケはもの凄い勢いで俺に抱きつくと、俺の頭のてっぺんに柔らかい頬を当てて、スリスリとほおずりしてきた。

「ん～……ラスク～！……クンクン。よかった！汗臭くないわ！今日もラスクは良い匂いだわさ～♪」

「う～。くすぐったいよビスケ」

「あ～～～！も～～～～！なんであんたはこんなに可愛いのかしら！！！」

ビスケはそう言うと、体全体で力一杯俺を抱きしめた。

自分で言うのもアレだが、実際俺は幼い子供特有のかなり可愛らしい容姿をしている。

ふわふわと柔らかい金髪に、くりっとした大きな緑色の瞳。

幼いながらも整いまくった顔立ちは、将来は結構なイケメンになるだろうこと間違いなし。

前世ではとても口では言い表せないほどのキモメンだったので……、多分その反動なんじゃないかと勝手に思っている。

って…力一杯？

ギュウウウウウウウッ！

「うぐっ……！？び、び、す……け……」

「（スリスリ）」

「ぐるじ、いぃぃ！……は、はなじ……で……」

「（スリスリスリスリ！）」

助けを求めるようにネテロおじいちゃんの方に視線を向けるが、どうやら口ではビスケに敵わなかったらしく（町中でおっぱじめる訳にもいかず）、道ばたにしゃがみこんで凹んでいる。

あ、豆の人ことネテロおじいちゃんの秘書のビーンズさんが来た。

なんだろう。

またネテロおじいちゃんに仕事かな？

あ～あ、連れて行かれちゃった……。

「び、びずげ……もう……ダメ……」

「（スリスリスリスリスリスリスリスリ！！）」

「……ぶくぶくぶく」

俺はラスク。今年で３（２８）歳になる転生者。

ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲの世界で、今日も元気に生きています。

「スリスリ……。――――う～ん、堪能した！ってラスク！？泡なんか吹いちゃってどうしちゃったのよさ！？ラスク～～～！？」

多分……。

第1話（後書き）

これは酷いキャラ崩壊。

第2話

時は１９８７年。原作開始１２年前。

俺は５歳になった。

前の世界だと、たぶん幼稚園の年中とか年長とか、その位かな。

この世界では幼稚園に通っているということはなく、もっぱら通信教育だ。

いろんな人に預けられながらここまで育ってきたので、当然一定の街に留まっている訳じゃないから、それしか選択肢が無いとも言える。

別に不満はない。

むしろそうしてくれとネテロおじいちゃんに頼んだ。

貴重な幼少期を狭い幼稚園で過ごすなんて考えられない。

同世代の子供達とお遊戯したり、ままごとしたり……？無理だ。

あれだけ夢見たファンタジー世界なのだ。

いろんな人に連れられて、世界のいろんな場所を見せて貰う方が何倍も楽しいし、有意義だ。

それに俺には、原作介入という大きな目標があるので、そんなことをしている暇はない。

そういえば、原作で１９８７年と言えば、グリードアイランドが発売された年だ。

正直言えばかなり欲しかった。

ゲームその物も面白そうだし、後々バッテラ氏がゲーム本体にもの凄い懸賞金をかけたりするし。

それに実際にＧ．Ｉを体験してみたいと前世では常々思っていた。

しかし当然、５歳児の俺が手に入れられるようなモノでは無かった……。

まずその価格からしてありえない。

５８億ジェニー？しかも現金一括払い！？

アホか！

たしかに、あれだけのゲームを開発するのに幾ら金が掛かったのか想像も付かないが、ゲームソフト１本でそれは高すぎるでしょ？

多分だけど、『その程度の金を稼げないヤツはＧ．Ｉをプレイする資格がない』とかそういう意図なのだろう……。

毎年、育ての親たちからお年玉をもらったりして、何とかコツコツ貯めた俺の貯金（既に前世の貯金額を大幅に上回っている）。

それをもってしても……うん、無理！まったく手が届きません。

しかも、１００本という出荷台数にもかかわらず、欲しがる人が２万人以上とかどんな競争率だよ……。

物売るっていうレベルじゃねぇぞ！？オイ！

ネテロおじいちゃん達のコネで手に入れようと思えば手に入ったんだろうけど、流石にそこまでのわがままは言えないので諦めた。

更に強くなるためには良い修行場でもあったんだろうけどね。Ｇ．Ｉ。

残念だけど、まぁ仕方ないさ。

原作に突入すれば、プレイする機会はあっちからやってくるだろう。多分。

そうそう。

更に強くなるためにと言ったけど、今の俺は同年代の人間に比べたら、かなりイイ線いってるんじゃないかと思う。

残念ながら未だ念は教えて貰っていないけど、その分基礎となる体はかなりのモノになってきた。

まぁおれを鍛えてくれる人達全員がチートみたいなもんなので、当然と言えば当然なんだけど。

強くなるための修行は４歳になった時から始めた。

本当ならもうすこし前から始めたかったのだが……。（そうでもしなければあの原作チート組に追いつけそうもない）

過保護すぎる親たちにとめられました、まる。

正直原作のイメージから、むしろ喜んで訓練してくれるような人達ばかりだと思っていたのだが、甘かった。

『つよくなりたい』『はんたーになりたい』『ぼくをきたえてほしい』と、当時３歳の俺が育ての親達に話したとき……。

すぐさまＲＳＳ会員全員が招集され、それはもう、信じられないほどの大騒ぎになった。

俺は、会員の溺愛っぷり（中にはそうでもない人も居るけど）をナメていた。

ＲＳＳ会とは、Ｒ（ラスクを）、Ｓ（健やかに）、Ｓ（育てるための）会。

俺の預かってくれた人達で構成されている委員会のことだ。

なんのこっちゃ。

俺の知らない間に得体の知れない委員会が、いつのまにか出来ていた。

そうして始まった緊急会議。

誰もが、俺の『つよくなって、はんたーになりたい！』という考えに異論はないらしく、むしろ喜んでくれた。

しかし、ネテロおじいちゃんを筆頭とした『大歓迎じゃ！今すぐ始めるとするかの？』派。

そして、ビスケを筆頭とした『まだラスクには早すぎるわさ！』派。

それに加えて、『一体誰がラスクに、どんな修行を付ける？』という問題。

意見がバラバラに別れ委員会は内部分裂を起こし、あーだこーだと喧々囂々の議論が一昼夜ぶっ続けで行われ。

たまに拳や蹴り、念能力なんかも飛び出したりして……。

会議場となったビル一つを修復不可能なまでに粉々にぶち壊して、……ようやく緊急会議が終わりを告げた。

その光景を目の当たりにしていた俺はガクガクと震えているだけだったのだが……。

会議の末、服や体の至る所がボロボロになった育ての親達が、失禁してちょっぴり濡れた股間部分を必死に隠す俺に向かって告げたのは、

『4歳になったらラスクに修行をつける！全員で！』

と言うものだった。

たったそれだけを決めるのに建物一つ倒壊させる自分の育ての親達の非常識さを目の当たりにして、今更ながらビビりまくっていた俺だったのだが……。

それと同時に、前世と違って『俺はこんなにも愛されているんだ』と言うことが分かったりして、正直かなり嬉しかった……！

あ、ちなみにぶっ壊したビルは、ネテロおじいちゃんが代表で弁償しました。

死傷者が出なくて良かったよ、本当に。

そんなこんながあって、俺が４歳になったと同時にようやく修行が始まった。

自分から言い出したものの、どんな無茶な修行をさせられるのかと戦々恐々としていたのだが……。

まずは土台となる基礎的な鍛錬から始めるという事に落ち着いたので正直ホッとした。

修行はとてつもなく厳しいモノだった。

ただし、前世の俺が同じ事をしたとしたら、だ。

転生した俺にとって、修行の日々とは本当に楽しくて、毎日がとても充実したモノだった。

なにせ、日に日に自分が成長していくのが、まさに手に取るように分かるのだ。

修行を始めた頃はたったの１回でへとへとになっていた腕立て伏せも、次の日には３〜４回も出来るようになっている。

流石はハンターワールド。

誰が言ったか、『ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲの世界の空気はプロテインが含まれている』前世のネットでいつだったか見聞きした気がする。

どうやらそれはマジだったらしい。

別に急激に筋肉が付いてマッチョな5歳児になっちゃった！！なんて、そんな不気味な現象は起こらない。

しかし、年相応の体と筋肉しか付かないのにどんどんと出来る事が増えていくのだ。

今現在、俺の見た目は明らかに5歳児相応なのだが、既に腕立て腹筋それぞれ1万回を数セットこなすのは余裕だし、短距離走でも長距離走でも前の世界の世界記録を易々と塗り替えられるだろう。

たった1年の修行でコレだ。

我が事ながら、ありえない……。

ファンタジー世界に生きているんだともう一度実感しました、俺。

しかし、修行を見ていてくれる親達は、物凄いスピードで成長していく俺を見て一様に驚きの表情を浮かべた。

どうやら、この世界の誰もが俺みたいな体じゃないらしく……俺は明らかに特別で、異常らしいです。

なんでだろ、俺が転生者って事が関係してるのかな？魂のナンチャラがウンヌンカンヌン…？しらんけど。

まぁとにかく、転生した俺に何も与えてはくれなかった生みの親。

しかし俺を捨てたその両親は、どうやら特別な体だけは与えてくれたらしい。

その一点には感謝しないでもない。

この分ならもうすぐ念の修行に入れるだろうとのこと。

嬉しい！嬉しすぎる。

一体俺は、何系なんだろうか？強化系？具現化系？もしかしたら特質系かもしれない！

そう考えるだけでワクワクしてくる。

そんなこんなで、俺ことラスクは5歳になった。

愛すべき育ての親達に囲まれながら、今はただひたすら修行の毎日です。

がんばるぞ！おー！

第3話

とある山奥にある、心源流拳法の修練場。

「3…2…1…ゼロ！そこまでっ！」

「……っ！……。……、ぷはーーっ！よっしゃー終わった～！――――あ～つかれた……」

服が汚れるのも気にとめずその場で床にぶっ倒れたのは、俺。

3時間全力で練を維持するという目標をようやく達成した！

……流石にもう疲労困憊だ。

「お疲れ様だわさ、ラスク。ようやくここまで来たわね。上出来よ！――――ほらほら、そんなところに寝転がらない！」

そんな俺を見守っていた少女、ビスケが怒るが、さすがにもう無理……。

オーラがすっからかんで、もう1ミリも体が動きません。

「お疲れ様です。ラスク君。」

両手にタオルとドリンクを持ってきてくれたのは、兄弟子のウイング先輩。

ウイング先輩は俺よりも前にビスケの弟子になっていて、現在心源流拳法師範代を目指して修行中。

なのだが、将来はビスケのように人を育てるということをしたいようで『私の修行にもなりますから』と、もっぱら俺の修行をサポートしてくれている。

ウイング先輩は今年で22歳になるというのに、寝グセや服の着方がだらしないのがいっこうに直らない。

それを見られるたびに、ビスケに引っぱたかれているウイング先輩。

そそっかしいが、弟弟子である俺に優しくしてくれる、いいお兄ちゃんのような存在だ。

「それにしても、君には本当に驚かされます。君のような少年がこんなにも早く、念を修めるとは」

「ありがと～ウイング先輩……。ビスケ～もう無理～！う～ご～け～な～い～！」

「全く……。しょうがないわねぇ……」

そう言いつつも、ビスケは魔法美容師（まじかるエステ）を発動させ、桃色吐息（ピアノマッサージ）をしてくれる。

修行の時は鬼のように厳しいが、やっぱりなんだかんだ言ってもビスケも優しいのだ。

厳しくも楽しかったこの3人での修行も、遂に終わりを迎えるというのはちょっぴり寂しい気がするな。

今は１９９２年、原作開始の7年前だ。

俺が念の修行を初めてから4年たった。

それと平行するように心源流拳法を習い始めて、もう4年の月日が過ぎたのか……。

早いモノで、俺は今年で１０歳になりました。

身長もぐんぐん伸びて、既にビスケ（少女形態）と同じ位の高さになった。

顔の方も段々とだが幼さが抜けてきて、順調にイケメン化してきています。わーい。

『念を修めれば常人よりはるかに若さを保てる』ということは、成長は止まり俺はずっと6歳児の姿のままなのか…？と、これだけが心配だったのだが。

どうやら杞憂であったようである。

今まさに成長期の真っ最中なので、ビスケを見下ろす位の身長になるのもそう遠くはないだろう。

基礎となる体づくりの修行が一段落付いたのが、俺が6歳の時。

俺はようやく念修行が始まると喜んだのだが、そこで浮上したのが『誰がラスクに念修行をつけるか』と言う問題。

全く念を扱うことが出来ないシロウトの俺に念を教えるのは、今までのように育ての親達がそれぞれが好き勝手修行を付けるよりも、誰かが付きっきりで修行を見た方が効率が良く、また確実らしく。

またもや開かれたＲＳＳ会の緊急会議の末、俺の念の修行に関してはビスケが一任されることになった。

心源流師範代として何人もの弟子を育て上げたその実績もさることながら、念能力者としても達人と言えるビスケならば、と皆が納得した。

……まぁＲＳＳ会員の全員が納得するまでの過程で、またもや一つの建築物が倒壊したのは言うまでもない。

とにかく俺は、この４年で四大行と応用技を一通り習得して、ついに練の持続時間が目標である３時間に達し、心源流拳法も一通りの基礎を身につけた。

『後はひたすら実戦経験を積みながら更なる高みを目指して修行に励むこと！』とはビスケの言。

１２歳のゴンやキルアが今の俺の練と同じレベルに達するまで、天空闘技場で念を知ってから、キメラアントに挑む前位だから……。

確かその間、約１年だったと思う……。

……つまり、俺はその４倍の時間が掛かった計算になる。

１０歳でここまで来た俺も十分異常なのだが、ホントニバケモノデスネ……アノコタチ……。

まぁ、原作が始まるまで後７年もあるんだ。

俺は俺で、気長にやっていこう。

とりあえずの目標を達成した俺は、４年もの間お世話になったビスケ達に別れを告げ、一足先に山奥の修練場を後することにした。

２人とも名残惜しそうだったが、ビスケはここに残り、ウイング先輩が師範代になるための最後の仕上げをしていくらしい。

頑張れウイング先輩！ズシがあなたを待ってるぞ！

別に今生の別れでもなんでもないのに、目を潤ませるビスケにつられて、不覚にも俺までうるっときてしまった。

昔と同じように俺を抱きしめて、今度は俺の髪ではなく頬にすりすりと頬ずりをするビスケ。

そして、それを微笑ましい物を見るような笑顔で見詰めるウイング先輩。

照れくさくなって、挨拶もそこそこに山を下りた俺の背中に向かって、２人はいつまでも手を振り続けていた。

このままビスケやウイングと一緒に修行を続けてもいいのだが、実はこの４年間ほとんど他の育ての親達に会っていない。

たまに修練場を覗きに来た人もいたのだが、ビスケが「修行の邪魔だわさ！」と追い返していたのだ。

そのかわりビスケによって、俺の修行風景を写した写真が一枚５００ジェニーで希望者達に配られたらしい。

……って、カネ取ったのかよ！？そしていつの間に撮った！？

……まぁとにかく、そろそろみんなに顔を見せておかないとね。

俺はこんなに強くなったんだぞー！というのも報告したいし、みんなと久しぶりに会えるのは楽しみだ。

誰かのハントに一緒に連れて行って貰って、お手伝いという名の実戦経験を積むのもイイだろうし……。

天空闘技場にでも行って、ついでにお金を稼ぐのもいいかもしれないな。

となれば早速、まず最初にネテロおじいちゃんの所に行くとしようか。

早速ビーンズさんに電話して、飛行船を手配して貰おう！

俺はラスク。今年で１０歳になった転生者。

今日も元気に生きています！

第3話（後書き）

主人公の念系統はまだ秘密ということで。

……実はまだ考えていないだけだったり／（＾ｏ＾）／

第４話（前書き）

このへんから少し話の展開が遅くなる予定です。

※注意
ジャンプを読まず、コミックスだけを買って読んでいる方、ごめんなさい。
ラスクの育ての親達についての話に、単行本（～２９巻）に収録されてないネタバレが入っています。
と言ってもチラッと、殆ど名前だけですが……。

それも嫌だという方は、申し訳ありませんが、該当部分（１１６行目辺り）と、後書きを飛ばして下さい。

第４話

山奥の修練場を後にした俺が、早速ビーンズさんが手配してくれた飛行船に乗り込んで数時間。

ようやく長い空の旅が終わり、ハンター協会本部に着いた。

顔パスで入り口を通してもらって（俺がネテロおじいちゃんの関係者だというのは協会本部の警備員も知っている）、エレベーターに乗り込む。

目指すは協会本部ビルの最上階にある部屋。

エレベーターから降りて、近くのドアを開けて部屋に入ると、ネテロおじいちゃんが畳部屋の真ん中に座って茶を飲んでいた。

「おぉ！帰ったかラスク！」

「ただいまネテロおじいちゃん！」

俺が来た気配には当然気が付いていたはずなのに、まるで知らなかったという風に驚いてくれる。

湯飲みを置いて、俺を笑顔で迎えてくれるネテロおじいちゃん。

その後ろには、彼が自分で描いた、黒地に白く『心』と書いてある巨大な筆字が飾られている。

達筆ですなぁ～。

巨大な『心』の額の直ぐ隣に、俺が正拳突きをしている写真が飾られているのは……まぁ見なかったことにしよう……。

この部屋は主にプライベートで茶を飲んだり親しい友人と話したりするための部屋で、ネテロおじいちゃんの和風趣味が多大に反映された一室だ。

……そして、原作でネテロおじいちゃんの遺言が撮影されたのもこの部屋。

「フォッフォ……。それにしても、大きくなったのう……」

「……まぁね！俺ももう１０歳だし！」

畳に座ったまま、しげしげと俺の体を眺めるネテロおじいちゃん。

俺が大人になるまでは、なんとか長生きしてほしいものだが……。

まぁ、キメラアントの王との一戦で自爆することがなければ、そのぐらいは長生きしそうだけどね。

余裕で。

「どれどれ……」

「？」

そう言って立ち上がったネテロおじいちゃん。

次の瞬間。

「――――ふんっ！」

一瞬でその姿が俺の視界から消えたかと思うと、背後からもの凄いスピードの正拳が飛んできた！

「わぁっ！！――――っとととと……」

とっさに横に飛んで避けたものの、ブンッ！と音を立てて俺の脇の下を通過していく念の籠もった右拳。

あ、あぶね～……。

俺も結構強くなったと思ってたんだけど……まさに、間一髪だった。

ほんとに１００歳オーバーのご老人ですか？と疑いたくなるが……。

まぁそのあたりは、流石はネテロおじいちゃん。

立ち上がる瞬間、一瞬足に集まったオーラを見破れたから良かったものの……。

その威力の正拳をまともに喰らっていたら……吹っ飛んでそのまま壁をぶち破って、ビルからアイキャンフライするところだったよ？

「ほぉ～今のを躱せるようになったか……。ふむ……。どうやら、ビスケに任せて正解だったようじゃの」

「イキナリあぶないじゃんか……！ギリギリ避けられたからいいけどさ！」

「フォッフォッフォ」

「まったくもう……。――――それで！？どう！？おれもけっこう強くなったでしょ！」

「ふん。今のはワシの全力の１割ほどじゃ！まだまだ甘い、と言いたい所じゃが……。――――その身に纏うオーラ。しっかり強くなって帰ってきたようじゃな！よくやった、ラスク」

「よっしゃー！！サンキュー、ネテロおじいちゃん！」

「この分ならワシと全力で組み手が出来る様になるのももうすぐかのぅ……」

「さすがにそれは、まだまだ先だって……」

「フォッフォッフォ！」

腰に手を当てて大きな笑い声をあげるネテロおじいちゃん。

この元気な笑い声を聞くと、帰ってきたんだなぁ～って気になるね。

「それで？どうじゃった、楽しみにしていた念の修行の方は？順調に進んだかの？」

「うん！いちおー四大行と応用技を一通り修めて、練は目標の３時間を達成したから……」

「ほう！それでは、後は実戦で経験を積みながら…といった所かの？」

「うん、ビスケにもそう言われたよ」

「そうかそうか……。まぁとにかくせっかく久しぶりに会ったんじゃ。ゆっくりして行きなさい」

「はーい」

ニコニコとあごひげを撫でながらそう言って、ネテロおじいちゃんは再び畳に腰を下ろした。

俺はネテロおじいちゃんの正面に座って、淹れて貰った日本茶を飲みながら。

修行の日々の思い出や、俺が居なかった間の他の育ての親達の話に花を咲かせた。

時間が経つのは早いモノで、あれやこれやと盛り上がっているうちに、いつの間にか既に日が暮れてしまっていた。

……おっと、そうだった。

これからどうするかネテロおじいちゃんに相談しないとな。

「そうそう、ネテロおじいちゃん。実戦経験を積むための場所なんだけど、俺、天空闘技場に行こうかと思ってるんだ」

「ほっ？天空闘技場か……。それはまた……」

「それである程度経ったら、今度はみんなに頼んでハントに連れて行って貰おうと思ってる」

「そうかそうか。皆喜んで連れて行くじゃろうな。――――しかし天空闘技場か……。今のラスクにはちと、物足りないんじゃないかのう？」

「そうなんだけどさ……。とりあえず自分がどこまで強くなったか知りたいし。それにやっぱり先立つものは必要というか……」

「フォッフォ！金稼ぎか！それならば彼処はぴったりの場所じゃな」

「うん！だから取り敢えず、みんなに顔を見たらすぐにでも行こうかなって思ってるんだ」

「ふむ……。４年もラスクに会えず、ＲＳＳ会の皆寂しがっておったしのう」

「俺も久しぶりにみんなに会いたいな～」

「今は居(お)らんが、サンビカも、リンネも……。それに『十二支(じゅうにし)ん』の連中も大分寂しがっておったぞ。――――ジンとパリストン以外じゃが」

「ははは……」

まぁ、あの人達はね……。

そもそも、一度も預けられたことがないし、それで良かったと思ってる。

ジンに預けられたりした日には、幾ら命があっても足りないような気がするしね……。

いや、気がするんじゃなくて、絶対足りないな！うん！

どっかの山奥にムリヤリ連れて行かれて、魔獣を釣るエサとかにされそうだし……。

パリストンは性格もアレだが……なんかイケメン過ぎてむかつく。

あのムダに白い歯とか。

「それじゃあ早速ＲＳＳ会員に招集を掛けるとするかの……」

「お願いしま～す」

「うむ。世界中に散らばってるあやつらのことじゃ。集まるまでしばらくかかるじゃろうし、とにかく今日はゆっくり休みなさい」

「は～い！」

そう言うと、ネテロは部屋を出て行った。

和風の畳部屋に残ったのは、俺一人。

目の前にあるお茶は既に冷めてしまった。

……うん、決めた。

今までもそうだったけど、こうして久しぶりに会って再確認した。

『ネテロおじいちゃんがあんな自爆なんて形で死を迎えるなんて、俺は認めたくない』

俺はネテロおじいちゃんが大好きだ。

ビスケも、他の育ての親達も……みんな。

だれも、絶対に、死なせたくない。

俺に前世の記憶があると。

この世界が前世で漫画になっていたと、話してみようか……？

そんなことはありえないと、頭でも打ったのかと、そう言われる

だろうか。

いや……必死に説明すれば、みんなら信じてくれるだろう。

だが、万一信じてくれたとしても。

原作を知った誰かが、ネテロおじいちゃんを引き留めようとしても。

ネテロおじいちゃんは、自分が死ぬ未来が分かったとして、その未来から逃げ出すような人だろうか……？

違う。そんなハズはない。

それは今まで育てて貰った俺が、だれよりも分かっている。

むしろ嬉々として、王に立ち向かうだろう。

そうなると……むしろ原作知識をみんなに教えることは逆効果になる。

本気になったネテロおじいちゃんをとめるのは、誰にも不可能だ。

例え今すぐ準備を始めたとして、ネテロおじいちゃんは王を倒せるだろうか……？

……正直、想像できない。

それ程、王は圧倒的だった。

伸び代がある分だけ、未だ俺の方が王を倒せる可能性は……あると、信じたいが……。

やはり難しいだろうか……？

でも、もう決めた。

決めてしまったんだ。

簡単にいかないのは分かってる。

俺は、絶対にネテロおじいちゃんを死なせない。

そのために、今、俺に出来る事は……。

第4話（後書き）

※注意
←は、「ネタバレ？私はいっこうにかまわん」という人のための説明です。

《サンビカ（サンビカ＝ノートン）》
ウィルスハンター（シングル）。ハンター協会の女医さん。美人（作者私見）
※ちなみに本作では、この人が捨てられて死にかけたラスクを救ったと言う設定。

《リンネ（リンネ＝オードブル）》
グルメハンター（ダブル）。協会最年長のおばあちゃん。ネテロと違ってヨボヨボ。

《十二支ん（ハンター十二支ん）》
ネテロ会長がその実力を認めた十二人。
有事の際に協会の運営を託す他、ヒマな時遊び相手になってもらったりしていた。
それぞれにコードネーム（子、丑、寅、卯…）が渡され、会長に心酔するメンバーのほとんどはその名に合わせ、改名したりキャラ変するなど涙ぐましい努力をしているが、例外もいる。メンバー全員が星の称号を持っている。
ゴンの父親であるジンもそのメンバーである。

《パリストン（パリストン＝ヒル）》
ハンター十二支んの子（ねずみ）。？ハンター（トリプル）。ハンター協会副

会長。

他のメンバーから大分嫌われてるっぽい。実際嫌なヤツ（作者私見）

第5話

深夜、協会本部にあるネテロおじいちゃんの部屋。

あれから、どうすればネテロおじいちゃんを死なせないように出来るのか…。

今、俺に出来る事は何なのか、ずっと考え続けている。

考え続けて…、いるんだけど…。

「うがーーー！！」

考えても、考えても！

どうしたら良いのか、さっぱり思い付かん！

プロハンターでもない俺じゃあ大した事は出来ないしなぁ…。

俺じゃなくて、みんなに頼んでキメラアントを探して貰うにしても、バルサ諸島近海やミテネ連邦を監視する体制を作ってもらうにしても。

かなりの理由や根拠が要るだろうし…。

理由や根拠を説明するには、やっぱり原作の事を話さなくちゃならないだろう。

でもやっぱりそれは…。

それに、そもそもそれでキメラアントの発生を食い止められるのか分からない。

そうだ！

今からキメラアントを探して始末しちゃうか！？

そもそもキメラアントって、確か第一級隔離指定種だったよな。

つまり…、何処かの国とか組織が厳重に隔離してるってこと。

なんでそんな危険な虫を駆除じゃなくて隔離なのか分からないけど…。

まぁ第一級っていう位だからよっぽど厳重に隔離されているはずで、そのキメラアントが逃げ出して突然変異したとは考えにくい。

つまり、この世界のどこかに未だ発見・隔離されてないキメラアントが居るかもしれないってことだ。

それを探すか？

…マジで？

前の世界では、アリは地球上に『1京匹』居るって言われてた。

この世界でも同じようなモンだろうし、その『1京匹』のアリの中からキメラアント1種類だけを探す…？

……無理です！

そう言う念能力でもない限り！

……俺には無理だな。

やっぱり『王を産む前に女王を倒す』これだな！

女王はNGL自治国に漂着して摂食交配を行って巣を作った。

打ち上げられた所をすぐに始末するにも、どこに漂着するか分からない以上待ち伏せは無理。

とするとゴンやキルアがG・Iをクリアする辺りでNGLに潜入して、女王が人間を喰うのを阻止するのがいいかもしれないな。

そうすれば、師団長クラスの奴らも護衛軍も居ない内に倒すこと

が出来る！

でももし、俺が女王を倒せなくて逆にエサにされてしまったら……？

……うぁあああああ！嫌だぁああ！嫌すぎるっ！

もし俺が喰われたら一気にキメラアントの戦力が増しちゃうことになるし…。

……やっぱりカイト達か、もしくはポックル・ポンズ達に同行するのが最良かなぁ？

そうすれば、もしかしたら彼らの命も救うことが出来るかも知れない！

しかしその場合女王を倒すためには、女王を守るネフェルピトーや師団長等の強敵達を突破しなくちゃいけない…。

うぅ～む……。

……うん、とにかくまずは修行だな！

女王を倒すにしてもなんにしても、俺が強くならなきゃ話にならら

ない！

「よっしゃー！やったるどー！！……と、その前に」

長い時間考え込んでいたから、喉が渇いた。

時計を見てみると、もう既に深夜三時をまわっている。

湯飲みを手にとって……って、ありゃ？

ネテロおじいちゃんが淹れてくれたお茶はもう全部飲んじゃったのか…。

ん～、急須には未だちょこっと残ってるな。

「ふっ…」

しかし！

こんな時のために、俺には『秘策』があるのだ！

今までやってみたことは無いけど多分イケルはず！

……まぁ、アレを知っている人なら簡単に思い付く事だろうけどね。

「ふふふ…」

まずは、急須に残ったお茶を湯飲みに入れて…。

そんでもって、両手を湯飲みにかざして…！

「『練』！」

すると、湯飲みの底に少ししかなかったお茶がドンドンとその量を増し始めた。

そのまま練を続けると、あっというまにお茶が湯飲みいっぱいまで増えていく。

「おぉっととと……」

お茶がこぼれる前に、湯飲みの口ギリギリまで増やした所で練をとめる。

……おわかり頂けただろうか？

つまる所、俺は『強化系』だったのだ！

今行ったのは、能力者自身の念系統を判断するための『水見式』。

この水見式を強化系が行った場合、水の量が変わる。

水が減ることもあるのかも知れないが、俺の場合はゴンやウイング先輩と同じように増えるのだ。

つまり『秘策』というのは、飲み物を増やすこと！

……うん、それだけです。

パームがコーヒーを増やしていたから出来ると思っていたけど……。

こうも上手く行くとはね。

前世で俺は、大好物の〇カ・コーラを水見式で増やしたいと何度思ったことか！

まぁ今はお茶だけど……。

とにかく、早速飲んでみよう！

「んぐっんぐんぐ…」

おぉ～！飲める！飲めるぞ！

やっぱりネテロおじいちゃんの買う茶葉は絶品ですね！

あれだけ急須に放置しててもこんなに美味しいんだから。

甘みがあって……それでいて渋みがあって……。

ってあれ……？

『甘み』？

ちょっとお茶にしては甘すぎないかコレ！？

「ブゥーーーーーーーーーッ！！……っ！？な、な、な……！？」

なんだこれ！？

何で！？どうして！？

強化系ってただ水の量が変わるだけじゃ無かったのか！？

最高級のお茶といっても流石に甘すぎる！

っていうか、むしろこの味は……！

「な、な、なんで……。――――なんでお茶がコーラ味になっとるんじゃぁあああ！」

じゃぁあああああ……！じゃぁああ……！ジャァァ…

俺の絶叫が、深夜のハンター協会本部に響き渡った。

第5話（後書き）

ということで、主人公は強化系（？）にしました。

キメラアント対策について納得できない部分多々あると思います。
それについては、強化系である主人公は「単純バカ」なのだ、ということでお願いします……。
散々考えた末、出てきた結論は結局「強くなる！」です。脳筋です。

むしろ作者の頭では、主人公に完璧なキメラアント対策をさせつつ原作に絡めさせる上手い展開が思い付きませんでした。
大きな山場となるキメラアント戦を無くしてしまうのも勿体ないですし…
ごめんなさい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5351z/

転生者のハンターライフ【習作】

2011年12月21日19時49分発行